住まい手参加研究会主催シンポジウム ｜ 日程 2022/06/28 ｜ 場所 すまい・るホール

シンポジウム
「住まいづくりを楽しむ時代へ
～ 私たちが改めて気づき学んだこと」
開催報告

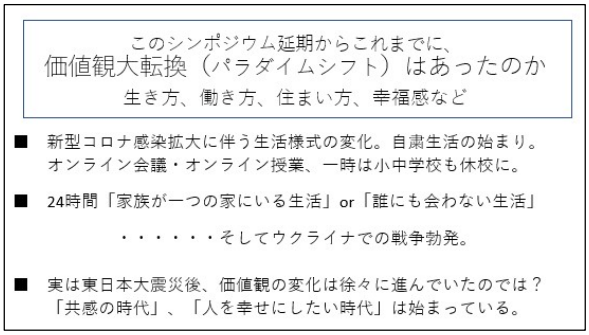
アキュラホームの社内研究所である住生活研究所（東京都新宿区）は、2022 年 6 月 28 日、すまい・るホール（東京都文京区）にて、シンポジウム「住まいづくりを楽しむ時代へ　～私たちが改めて気づき学んだこと」を開催しました。

（右記URL よりシンポジウム当日の動画が閲覧できます）　https://youtu.be/s2yfwwe_SgA

「暮らし方は自分で決める、自分で作っていく」
株式会社アキュラホーム　伊藤 圭子

与えられた住環境に住むだけではなく、自分から住まいづくりに積極的に参加し、室内を設えたり、地域の祭りやカフェに行ったり、能動的に暮らした方が楽しい、ということは分かっているものの、なかなかできない。これをどのようにしたらよいかを考えるということを目的に、アキュラホーム住生活研究所を事務局として、2018 年に「住まい手参加研究会」が発足しました。研究会として 2019 年 3 月に第 1 回シンポジウムを開催し、その後も開催を企画しましたがコロナで延期を繰り返し、本日、開催が実現しました。研究会発足後、今日までの間に、生き方、働き方、住まい方、幸福の感じ方に大きな転換があったのかどうかについて考えてみたいと思います。

まず仕事や学習がオンライン化したというのは大きな転換でした。そして自粛で 24 時間、家族が一つの家に居る生活を皆体験し、一人暮らしの人は誰にも会わない生活を体験し、ウクライナでは戦争も起きた。皆、何かしら考えたはずです。今は共感の時代とか、人を幸せにしたいと考える時代になったと言われていますが、それはこの期間で変わったことなのか。私は東日本大震災の後から徐々に変わってきたものがここで誰の目にも明らかなものとして浮上したのではないかと思っています。



この研究会はコロナ禍前から活動しており、ゲストスピーカーを招いて色々お話を伺ってきました。そのときから既にシェアの話、移住の話などが出ていました。夏水組代表の坂田夏水さんには、コロナの期間中に研究会に参加して頂きましたが、彼女はインテリアを広く提供されています。今までの常識にとらわれず、自分が本当に住みたい環境にすることを応援し、それを自分の手で作るための内装の学校も運営されています。坂田さんのご友人で、暮らしかた冒険家の伊藤菜衣子さんは古民家のリフォームを手がけられており、自身が育った北海道の家に戻られた際、すごく結露するので、自らの手で高気密高断熱の家に変えられました。その時、高気密高断熱の家が生活をこんなに楽にしてくれるものかと気づいた、という話をして頂きました。自分の幸せのため、自分で動く、これらの動きはコロナ前から目立つようになっていました。

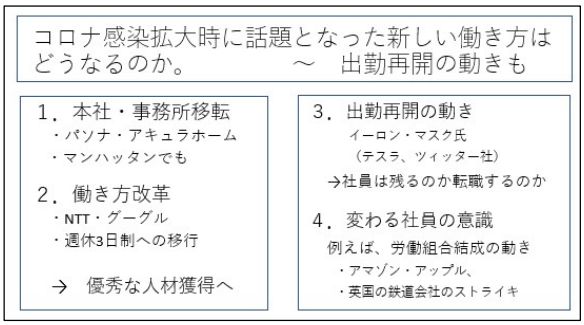
また、視察も行いました。2018 年に長野市の門前町の倉石さんからは、家賃が安い家でないと誰も移住してきてくれないので、空き家を 3 年分の家賃に相当する工事費で「ゆるいリフォーム」をするという事業モデルによって、人を集めることができるようになったという話を伺いました。2019 年には岩佐先生のご紹介で、新潟市の越前浜に移住された星野さんからお話も伺いました。移住の話はコロナ前からさかんにきかれるようになっていました。

コロナ禍以降でお話を伺ったのが、つみき設計施工社の河野さんとハンディハウスプロジェクトの中田さんです。住まいづくりを住まい手と一緒に楽しむ。その過程も参加して楽しみ、そうすることで住まい手もとても豊かになるというお話をして頂きました。

1 カ月前には東北石巻市の巻組を訪問しました。巻組代表の渡辺さんは「なおしすぎないリノベーション」というライフスタイルを提供し、居場所づくりをされています。また、同じく視察で訪問したキボッチャの三井(みい)さんは、廃校を利用した防災体験施設を運営されている元自衛官で、災害時ギリギリの状態から生き延びるための術を伝える活動をしています。

パラダイムシフトがおきたとしたら、それはいつだったのか。それは東日本大震災を経験したころから徐々に進んでいた価値観の変化が、この 2 年半で誰にでも見えるようになってきたのだと私は思っています。ウクライナの戦争に触れ、「当たり前だと思っていた生活は脆かった」「普通に生活できることの幸せを大切にすべきだ」「自分にとって大切なものを守りたい」という気持ちが湧き、一方で「無力感、孤独感、貧困、分断というものに対抗していかなければならない」という前向きな気持ちの一つとして幸せを感じること、充実することを大切に思うものがあるのではないかと考えます。

コロナ感染拡大時に話題となった新しい働き方としては、淡路島に本社機能を移したパソナのように、本社の移転、事務所移転があります。また、NTT、Google のような本格的なリモートワークの導入。週休3日制に移行して成功しているのはアイルランド、アイスランド。これらの動きはすべて優秀な人材が欲しいからという理由です。逆にイーロンマスク氏(テスラ社、ツイッター社)は、通常の出勤を再開させると言っています。これからどのようになっていくのか、まだ今は流動的です。



阪神淡路大震災の時は、道路が壊れ、既存不適格の住宅が潰れ、大きな被害が出ましたが、その時はインフラを強くすることや、建築物の耐震化を進めれば何とかなると思っていました。しかし、東日本大震災では、命を守ること、逃げることが一番大事だと気づきました。

今回のパンデミックを受け、まだまだ未知の病気は発見されるだろうと思いました。また、気候変動・戦争・エネルギー危機など、個人ではどうしようもない問題が起きています。しかし、今でもだから一生懸命生きなければならないと私は学びました。他人に生き方を決めてもらって流されて生きるには自分の持ち時間は少なすぎ、そして暮らしのベースである住まいに生き方は影響されるため、それについてもっと積極的に考えるべきということも学びました。

そして私の発表の題名に繋がりますが、暮らし方は自分で決める、自分で作っていかなければダメ、人とつながらないとダメ、無力感や貧困など、そういうものに負けてはダメ、ということを学びました。

「つくることとつながることのサバイバル」

法政大学デザイン工学部建築学科　教授　岩佐 明彦氏

私は仮設住宅の研究をしたこともあり、そこで暮らす人々がお互いの工夫を参考に、自分も改良していくのを見て、作るということがコミュニティや人のつながりを作る、といった楽しいイメージを持っていました。

メイキング・イズ・コネクティングという海外の本でも、YouTube やインターネットを使い、自分が発信したことに対してリアクションを受けることができるようになり、何かを作っていくことが人とつながっていくようになってきた、ということが書かれています。

「ダンボールを加工して面白いものを作ってみよう」という世界中で同時に行うイベントもあり、作ることとつながることが色々なところで言われているのを見て、面白くなりそうだと考えていました。

コロナが始まってすぐの頃、マスクやフェイスシールドが不足し値段も上がっている中、デザイナーの立川さんという方が A4 のクリアファイルを加工してフェイスシールドをつくり、ネットで発表すると大きな反響を呼びました。

住まいに関しても、換気の重要性が言われ始めた際、パソコンのクーリングファンを窓につけると良いなど、ネット上で公開されると話題となりました。コロナで状況が変わってくる中、どうやって克服していこうかという動きが今まで以上に上がっていたような気がします。一方で、発信した時のリアクションを受けたり、作ったモノを皆でシェアしたりなど、情報は共有されているが「場」が供給されていないため、コロナ前のワイワイ集まる楽しさがなくなった感じはします。つながりというものの質が変わり、インターネットを媒介とした DIY カルチャーは盛り上がったものの、充実感はそれほどない、そのような印象を持っています。

次に、「行き来できない中での住まい」についてですが、在宅時間が多くなったので家の中を少し改造することが盛んになった、と多くの方が言っています。ずっと家にいなければならないので自分の作業スペースを押し入れの中やリビングの片隅に作ったという人もいます。また、今までは来客があるので室内を装飾することもあったが、もうあまり来客がないので、迎

え入れる設えというよりは、自分たちの巣のような設えがされるようになったのではないかと思います。

私自身も DIY 的なことを行いました。私は関西出身で両親は奈良に住んでおり、実家に帰ることができていません。そのような中でも実家の情報を手に入れる方法を考え、家の中に温度センサーをたくさん設置して、両親の生活の様子を見守れるようにしました。

家の中だけではなく、外も行けるエリアが限定されました。散歩がブームになり、皆があちこち歩いて「discover ご近所」という言葉が話題にもなりました。私の大学の同僚は京都に住んでいて、全く東京に出られなくなり、暇だったので毎日散歩をしたルートを GPS で記録をつけていると、1 年で京都の中央部をほぼ制覇してしまい、飽きてきたので今は滋賀県の方にまで遠征しています。フィフティーンミニッツシティという言葉が盛んにささやかれるようになり、自分の近所が大切になるということが言われ始め、いよいよそういう時代がやってくるのかという気もしたのですが、いざ動けるようになってくると、移動の快感や人に会うことの楽しさがこういうものを消し飛ばしてしまうのではないか、とも思います。

次に、コロナ中に流行った「ソロキャンプ」について話を移します。ソロキャンプは普段の環境と離れ、リセットしてワイルドな生活を楽しむとか、シンプルな生活を再現するのが目的なのかと思っていましたが、実際はこの想像とはかなり違い、ネットで調べたソロキャンプのアイテムは、ちょっとした引っ越しレベルの持ち物があります。これを見て、自分の環境を 1 から 100 まできっちりセットアップしてみたいという、マイ環境構築のようなモチベーションがあるように感じました。実際の住まいに手を入れることは不可逆的な印象があり、多くの人はそこまでは手を入れたくないが、少しだったら変えてみたい、でも戻せるようにはしたいという、実際の住まいに対する要求とは少し違う要求が、このソロキャンプブームの裏にあるのではないかと思います。

一方で、もしコロナがなかったらどのような議論が進んでいたのか。少し違う側面ですが、大学支援機構から頂いたデータで、大学に在籍する障碍のある学生の推移というものがあります。これによると、障碍を持つ学生は実は急激に増えており、コロナ禍でもどんどん増えています。理由は、障碍があるということを表明すれば、社会がその人に対してきちんと配慮するということが求められるようになったためです。どういう人が増えてきたかというと、精神障碍や発達障碍といった、一見、障碍があるように見えない人たちです。彼らの多くは、情報が過剰に取り入れられてしまうことが原因で混乱してしまうので、ご自宅の部屋の明るさを調整していたり、音が吸音される環境を作ったりするなど、彼らなりに過ごしやすい環境に変えていることを知りました。「私らしさ」を考えるとき、私的な部分や趣味的な部分を拡大していく方向もあるが、今の住まいがあまりフィットしないので、自分にフィットさせるという方向もあったのかも知れません。

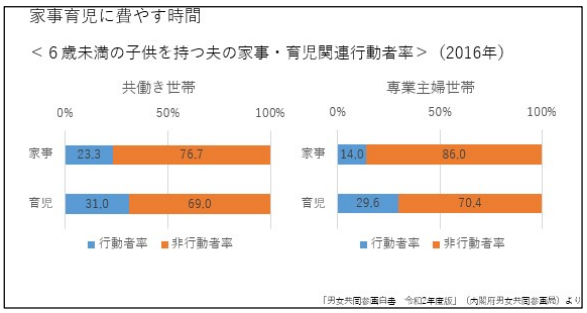
「私らしい住まい」というものがまだ手に入れられてない人は、見えていないだけで実は大勢いて、この人たちにどうサポートしていくか、そういう社会的な着眼点もあったかもしれないと思います。

「働き方が自由になると住まい、暮らしはどうなるか」

駒沢女子大学人間総合学群住空間デザイン学類　専任講師　山崎 陽菜氏

まずは家事・育児の現状について、データを基に紹介します。

6歳未満の子どもを持つ夫婦が家事育児にどのぐらい行動しているかといったデータになります。家事については共働き世帯で約 8 割、専業主婦世帯では約 9 割の夫が行なっていません。育児については就業形態にかかわらず 7 割の夫が行っていないという結果が出ています。



家事時間は、単独世帯では男性と女性でほぼ同じですが、結婚後、女性は男性の 2 倍以上の時間を家事に費やしていることがわかります。この傾向は子どもが生まれてからも変化はなく、育児時間も女性は男性の 2 倍以上を費やしています。女性は結婚と共に仕事をセーブしつつ家事育児をしますが、男性は子どもが生まれると仕事時間がさらに増えます。これが示しているのは、夫は仕事で妻は家事育児というような意識から夫婦ともに抜け出せていない、ということではないでしょうか。

家事育児に費やす時間

＜1 日当たりの家事等時間と仕事等時間（有業者：仕事のある日）＞（2019年）

	家事	
	女性	男性
単独	1時間10分	1時間
夫婦のみ	1時間59分	45分
夫婦＋子ども（就学前）	2時間11分	47分
夫婦＋子ども（小学生）	2時間41分	45分
夫婦＋子ども（中学生）	2時間47分	50分

2 倍以上

「令和元年度家事等と仕事のバランスに関する調査報告書（令和元年度内閣府委託調査）」（株式会社リベルタス・コンサルティング）より

仕事と家事・育児・介護、その合計時間を見ると、一番多く時間を費やしているのは就学前の子どもがいる女性です。子どもを持つと家事育児の大半を担うのは女性ですが、実際に育児に重きを置いてそれに費やすと、家事をする時間がありません。家事の方に費やすことを想像すると、子供をいくらか放置してテレビを見させるなどせざるを得ません。そもそも一人で家事育児を両立すること自体がかなり無茶なことです。それを頭に入れていただいて夫婦の家事育児の分担割合を見てください。

家事育児に費やす時間

＜1 日当たりの家事等時間と仕事等時間（有業者：仕事のある日）＞（2019年）

	育児	
	女性	男性
単独	4分	1分
夫婦のみ	2分	1分
夫婦＋子ども（就学前）	2時間27分	1時間10分
夫婦＋子ども（小学生）	1時間16分	31分
夫婦＋子ども（中学生）	35分	13分

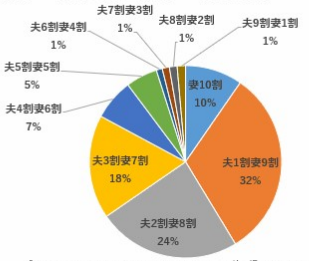
2 倍程度

「令和元年度家事等と仕事のバランスに関する調査報告書（令和元年度内閣府委託調査）」（株式会社リベルタス・コンサルティング）より

夫が 1 割で妻が 9 割というのが 32%と最も多く、次いで夫が 2 割、妻が 8 割です。夫が全く家事育児をしない、妻 10 割が 1 割もいます。これは共働き・片働きを問いません。この割合は年齢が高くなるほど妻の負担割合が多くなっていきます。その分担割合で夫婦の満足度はどうなっているのかというと、夫は妻の分担割合が 6〜10 割で、8 割以上が満足と答えています。しかし 9 割以上負担している妻が満足と答えているのは 4 割しかおりません。8 割以上の妻が満足と答えるのは、夫が 3〜5 割分担する時です。多くの夫婦は、夫は満足しているが妻は不満を抱えている、と言えるのではないでしょうか。どんな分担割合で満足するかは、それぞれの夫婦によって異なります。例えば、ゴミはゴミ捨て場に出すだけ、食べたお皿をシンクに置くだけで「やってあげた」とか「感謝してほしい」というような夫なら、やってもらわない方が妻もストレスを感じずに済むと思うことも確かです。分担割合というよりはその質自体も大切になってきます。ただ、夫は 1 割でも負担が増えると、満足と答える率が下がります。妻は夫が 3 割負担してくれれば、8 割の人が満足と答えます。ここに意識の齟齬が感じられるのではないでしょうか。

家事育児の分担・協働

家事育児の分担割合と満足度
＜夫婦の家事・育児の分担割合＞（2009年）

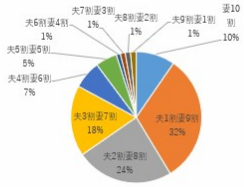


「平成21年度 インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査 最終報告書」（内閣府）より

家事育児の分担・協働

家事育児の分担割合と満足度
＜家事・育児の分担の満足度＞（2009年）

	男性	女性
妻10割	81.2	41.3
夫1割妻9割	80.5	44.7
夫2割妻8割	81.2	67.6
夫3割妻7割	82.8	82.2
夫4割妻6割	86.5	94.3
夫5割妻5割	78.7	95.6
夫6割妻4割以下	57.5	72.0
		%



「平成21年度 インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査 最終報告書」（内閣府）より

では夫が育児に参加してもらうためにはどうしたらいいか、それを聞いた調査がこちらです。1 位は男性の育児参加に対して職場の理解、2 位が休暇の取得促進、3 位が勤務形態の多様化、となっています。これを見ると、リモートワーク自体は一つの手であると言えるのではないでしょうか。

男性の育児参加
＜男性の育児参加推進策：上位5項目＞（2009年）

1位　男性の育児参加に対する職場の理解
2位　休暇の取得促進
3位　勤務形態の多様化
4位　長時間労働の是正
5位　男性自身の意識改革を促すための広報・啓発活動

「平成21年度 インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査 最終報告書」（内閣府）より

日本家政学会より出された研究によると、父親の育児参加とリモートワークに関する調査では、父親の育児参加はリモートワークによって物理的障壁が低くなっていることや、夫婦間のコミュニケーションが多くなることで、不安等の共有がスムーズになること、コロナ禍で夫の勤務が在宅で増えることで育児参加が多くなる、といったような結果が出されていました。その中ではリモートワーク以外にも、家事や育児に対して夫に賞賛や感謝を与えることで育児参加を促進するというような結果も出ていました。

コロナ禍で働き方が変化したことで、住み替えをしたいと考え始めた人がいる一方、この先どんな働き方が定着するか分からないということで住み替えをやめた人もいます。

暮らし方・働き方の価値観の変化として、住まいの周辺環境で何を重要視するのかという調査では、どの年代も交通の利便性や繁華街へのアクセスの利便性を重要視する割合が低くなってきています。

＜住まいの周辺環境の重要視度の変化＞（2020年）

20～30代：親族の近く、病院の近く　高
交通利便性、繁華街へのアクセス利便性　低
40～50代：インターネット環境の充実　高
交通利便性、繁華街へのアクセス利便性　低
60代以上：職場が徒歩圏内、病院の近く　高
繁華街へのアクセス利便性　低

「コロナ禍前後における暮らし方・働き方の変化」（2020年9月，株式会社価値総合研究所）

また、就業地に関しても 20～30 代は通勤時間の短さや都心にあることへの重要視度が低下しており、40～60 代以上では都心であることを重要としなくなってきています。どの年代でも言えるのが自然豊かな場所にあることが重要と思われています。

＜就業地の環境の重要視度の変化＞（2020年）

20～30代：自然豊かな場所、自然災害への強さ　高
住まいからの近さ・通勤時間の短さ、都心にある　低
40～50代：自然豊かな場所、自然災害への強さ　高
都心にある　低
60代以上：自然豊かな場所、自然災害への強さ　高
都心にある、職場近くに美味しい食事場所　低

「コロナ禍前後における暮らし方・働き方の変化」（2020年9月，株式会社価値総合研究所）

住宅に関しては全世代ともに戸建志向が向上しています。20～30 代はここ最近、家を持つことのメリットが疑問視され、賃貸に住んで気軽に住み替えることがいいという傾向がコロナ前は徐々に増えていましたが、コロナ禍になって再度持家志向が復活してきていることが分かります。

＜住宅に対する重要視度の変化＞（2020年）

20～30代：書斎空間・趣味スペース・個室の確保、持ち家、
戸建て、インターネット環境　高
共同住宅、賃貸　低
40～50代：書斎空間・趣味スペース・個室の確保、戸建て
エネルギー性能の良さ、大空間の確保　高
共同住宅　低
60代以上：書斎空間・趣味スペース・個室の確保、介護や見守り機能
戸建て　高

「コロナ禍前後における暮らし方・働き方の変化」（2020年9月，株式会社価値総合研究所）より

暮らし方や働き方に対しては、全ての年代で自分の時間や家族との時間、自分の健康を重要としており、出世に対してはさほど重要とは思わなくなっています。

＜暮らし方や働き方に対する重要視度の変化＞（2020年）

20～30代：自分の時間、家族との時間、自分の健康　高
同じ地域で住み続ける、同じ職場で長く働く、出世　低
40～50代：自分の時間、家族との時間、自分の健康　高
出世、出勤時間・勤務時間の定時制・規則性　低
60代以上：自分の時間、家族との時間、自分の健康　高
同じ地域で住み続ける、出世　低

「コロナ禍前後における暮らし方・働き方の変化」（2020年9月，株式会社価値総合研究所）より

働き方が自由になると、住まい暮らしはどうなるかというと、第一に、暮らしの充実のために費やす時間を再配分できます。趣味・子育て・介護、それと、都心にいると空気が合わず精神的に病んでしまう、そういった人たちが自分の好きな場所に引っ越すことにより、それを解決したり、暮らしの充実を図ったりすることができます。第二に、最適な働き方、働き場所が選べるということです。リモートワークの場所は自宅と限る必要はないと思いますし、職場にて対面でやる方が働きやすい人もます。それぞれが最適な場所で効率が良くなるような働き場所を選ぶ時代になっていくのではないでしょうか。最後に、住まいを豊かに快適に充実させたいという気持ちが向上することが挙げられます。リモートワークがある程度継続される限りは、家の中でやっていくことが色々増えるので、充実させて広めていきたいという気持ちは減らないと思います。ただ、長時間労働が改善されない限りは、それらに傾ける心の余裕が生まれません。人々の心は、がむしゃらに働いて出世することより、自分の時間や健康が大切だと思い始めていますので、長時間労働自体もだんだん見直しに入っていく時期なのではないかと思っています。

「創造する生産者がかっこいい」

長岡市総合政策アドバイザー(前長岡造形大学理事長)　水流 潤太郎氏

私は長岡造形大学にいましたが、コロナの時、学生の就職地にものすごく変化がありました。東京都内におよそ半分の学生が就職していたのが、コロナが起こって20%ぐらいに落ちてしまいました。長岡造形大学は 8 割が新潟県外から、全国から学生が集まってくるデザインの大学で、自分の出身県への U ターンが、東京が減る一方で起こった現象です。地方の自治体は分散型社会に向かってほしい、このコロナ禍はチャンスだと、皆が思っていますが、果たして東京から地方回帰が進むのだろうか、微妙な状況のように思います。

地方から若い人たちが出ていくのは仕事がないからと思われるのですが、長岡市では長岡ワーカーという仕組みをつくり、完全リモートワークワークで東京の大都市圏の仕事に就くという施策を進めています。長岡市内には長岡技術科学大学や長岡高専など、技術系の高等教育機関もあるので、IT 人材が欲しい企業から見ると長岡は魅力があるところらしいです。でも、ただ職場が面白くなるだけではダメなのだろう、暮らしや街自体が面白くないとダメだということを常々私たちは考えて、その念から、コンセプトは「発酵するまちをめざす」としました。

ここに糠みその絵がありますが、糠床というのは適切な環境をつくってやると、いろんな種類の微生物たちが活動し、活動することによって、糠漬けができるわけです。風通しの良い環境で思い思いの仕事や活動を自発的にのびのびと続けることができる、そういう街、暮らしであることが、長い目で見れば街を元気にするということだろうと考えました。

具体的に何を行ったかというと、毎年HAKKOトリップというイベントの開催で、それがとても受けています。何が受けているかということですが、皆が一緒に楽しんでいて、フラットでリラックスした空気感があり、イベントに関わる人たち自身もすごく楽しそうにやっているところだと思います。

イベントだけ盛り上がり、それで終わると意味がない、日常化すべきということで、サンデーグッドモーニングマーケットという朝市を定期的に開くようにしました。主催は私も関わっているミライ発酵本舗株式会社という会社で、「近者悦、遠者来」という理念を掲げてやっています。近所に住んでいる人たちが楽しく笑顔があるような暮らしをしていると、遠くの人たちが行ってみようかと思って集まってくる、そういう順序で街づくりをしようとしています。

私が関わっている別の例で、柿川という小さな川の沿線の住宅地なのですが、そこで住まい・アトリエを街に開く活動をしています。ここにはシェアスペースや工房、私設図書館といったものがあります。

私たちが運営している一般社団法人のシェアアパートメントでは、学生が作品展をやっています。416スタジオと言いますが、ここはその後改造して、私が今住んでいます。シェアアパートメントの 1 階には共用の部屋があり、よく食事会が開かれていて、この写真は「旅する生ハムシフォン」という、生ハムを研究し作っている人と、シフォンケーキを主としてスイーツを作っている女性とがユニットを組んでお客さんを呼び、振る舞っている様子です。こういった会もあれば、先週は 20 人くらいの人たちが集まって、「シェア飯」と言うのですが、それぞれ食材を持ち寄って一緒に料理をして食べるという会もあり、楽しそうにやっています。

まとめですが、「受け身の消費者から主体的に自ら創造する生活者になることが幸福感を増す」これは、作ることに没頭することがすごく充実した wellbeing を高めてくれるということです。「自らつくる活動は、他者との良質なコミュニケーションの機会を増やしてくれる」これは、一人で作るよりは一緒に作ったほうが楽しいということ。創造する、作るという行為はいろんな分野であり得るのですが、特に「住まいのカスタマイズや DIY、リノベーション」といったものは、私たちが創造する生活者になるための格好の舞台だと思います。自由に思い思いの活動ができるような環境を作る・街になる、という事が、若い世代を中心にして、あそこっていい街だよねと思ってもらえるような大きなポイントなのではないかなと思っています。

「住まいづくりを楽しむ時代へ」

東京大学大学院 特任教授／住まい手参加研究会　座長　松村 秀一氏

今日は皆さんにお話いただいたのをまとめる役割かなと思っていたのですが、一昨日、一昨々日と鹿児島の先端的事例に行く機会があり、今日お話するのに間に合いました。つくっていく行為そのものがめちゃくちゃ面白いことになっているという、そういう先端的事例です。

「作ることを楽しむ」ということが今からご紹介する方々の一番の力点で、ものすごく楽しんでいます。一緒に行った人たちと色々話した結果、先に結論を言うと、ポイントは「ゆるさ」です。先端的な事例と言っているのは、今の普通の住宅業界で起こっていることとはかけ離れた地点に立っているもので、明日、住宅の業界が普通にこうなるということではなく、かなり遠いところにあるが一つのベクトルを示しているものとして見ているということです。その特徴の最たるものが「ゆるさ」です。

現代の普通の住宅づくりというのは、どちらかというと「ゆるさ」を排除してきており、例えば工期は短くきちっと守らなければならず、これはゆるくありません。 コストの合理化・コストダウンといったことは「ゆるさ」とはまったく逆の方向にあり、それできちんとした性能の、きちんとした建物を作らなければならないという考え方でどんどんものを作っていますが、ここに「ゆるさ」というのは基本的に存在・許容されていません。住み手自身が参加しないケースで請負契約を結ぶというと、この住み手と請負業者との関係は、決してゆるい関係ではなく極めて厳しい関係に置かれます。あらゆる意味で今の普通の住宅づくりは「ゆるさ」からかなりかけ離れたところにあります。

鹿児島の例は、特徴が「ゆるさ」そのものということになります。この中心人物は加藤潤さんという方で、今まで住宅づくりをやってきたとか、今まで大工だったとか、そういう人ではありません。指宿の隣あたりにある頴娃（えい）町というところ、そこで何故だか弟さんが始めた「タツノオトシゴの養殖」の事業が面白いということで、それを手伝いに行ったまま住み着き、頴娃町の観光地化を進めて成功した方です。その間も別に大工をやったりということはなく、むしろその観光地としてどう頴娃町を変えていくかということに奔走したり知恵を絞ったりされてきたのですが、その次の段階の取り組みが「空き家」です。築 90 年といった古い民家がたくさんあり、それを何か別の拠点に変えていくことを始めました。

元々DIY が趣味で、多少腕の覚えもあったので、仲間を集めて改造を始めたら、どんどん仲間が増え、そのうち、自分は大工ではないが大工のようなことをしているので呼び方を考えようということになり、「コミュニティ大工」としたそうです。

空き家の再生には様々な不動産関係の事が出てきますが、その相談に乗るところから実際の工事までマネジメントしていくということを、この加藤潤さんは行っています。そこを使っていこうとしている人たち自身が工事に参加するのを全体的にサポートしているが、現場には草野球のチームのように毎回同じようなメンバーが集まって来るらしく、中にはすべての現場に来ていたり、土日になると必ず来るという、県庁の職員もいて、この県庁の職人は公務員大工と呼ばれています。この人たちは完全ボランティアです。

横川という街で商店街が全てダメになっている中、ここを地域活性化させるきっかけを作りたいと移住してきた女性が、築 90 年の建物を変えて、カフェとゲストハウスを 100 万円くらいで作りたいが誰に相談したら良いか分からないと困っていると、加藤潤さんに言えば何とかなるかもしれないと聞いて相談に行った。すると、手伝ってくれる人への呼びかけや予算の管理、運営をコミュニティ大工が行い、現場は集まってくれた素人集団と数名の大工さんとで実施したそうです。

根占（ねじめ）というところでは、鹿児島市から移住してきた 20 代の女性が、築 70 年の建物を改造してゲストハウスにしたい、という案件があり、ここでもコミュニティ大工に相談をして、全体で恐らく 40～50 人が参加して、ゆるく管理されながら自分たちで作った。参加者の方数名にお話を伺いましたが、毎日人が集まってきて楽しいので、よそから人がどんどん集まってくるとのこと。ここの施主の女性の方は今、コミュニティ大工になっています。コミュニティ大工はこのように段々増殖していっています。

蒲生というところでは、山之内せり奈さんという看護師の方が、築 80 年くらいの古民家をコミュニティナースの拠点にしたい、という案件があった。コミュニティナースというのは、病院に所属するのではなく、街中で近隣の人たちの健康上の相談ごとに乗るような看護師で、島根発祥の概念です。コミュニティナースという言葉自体がこのコミュニティ大工っていう言葉の元になっています。工事期間中は毎日のように食事会が開かれて、これが楽しくてやめられないといい、ここでも 50 人くらいの人が集まってきたようです。

このように、作ること自体が楽しくてしょうがないという人たちのグループができている。構造体や屋根の部分は 90 年前に本当の大工がつくり、出来上がっている。それ以外の部分は素人集団をコミュニテ

ィ大工が全体をまとめながら行う。基本的に工事として施主の直営で、これが面白い。コミュニティ大工がかかった費用の請求書や領収書をとっていて、それを施主が現金で毎週精算するという形で運営している。施主の直営です。施主自身も作る現場に参加し、その現場を経営し、それを成立させるコミュニティ大工という新しい職能が誕生してきていて成立している。しかもそれは作ること自体が楽しいという人 DIY 好きの人たちが集まり、空間作りを支えているという、一つの未来形を示していると思います。これは冒頭申し上げたように、今の普通の住宅産業とはかなり離れた位置にあり、行動原理が基本的に違っている世界です。けれども、ものづくりという意味でも、施主の喜びや、参加している人の満足感など、目指すべき方向としては今の住宅産業界でも同じことです。一つのモデルとし「ゆるさ」を基本としてこういう事例が出てきているというのが私個人にとって、ここ 10 年ぐらい見た中でも特に印象深い、未来を指し示すようなモデルの一つだろうと思いました。

パネルディスカッション
「住まいづくりを楽しむ時代へ －私たちが改めて気づき学んだこと」
モデレーター：松村氏（住まい手参加研究会　座長）
パネリスト　：水流氏、岩佐氏、山崎氏、伊藤氏

松村　バーチャル空間でいろんなことをやるということと、実空間との関係はどのようになっていくのかということについてご質問いただいています。岩佐先生、ご意見はありますか。

岩佐　確かにこのコロナの間、連絡を取る方法はズームやオンラインネットワークといった、かなりサイバースペースに力を借りていますが、サイバースペースがどんどん充実していくと、そこに引きこもってしまい、実社会に出てこなくなる人が増えるのではないかと懸念されている方なのかなと思いますが、そこまで深刻な事態にはならないのではという気がします。スマホを見ながら電車に乗っている人がいますが、実社会の生活とバーチャルはどちらか片方というように完全に分かれているものではなく、今も既に混ざっていると思うので、この 2 つが適正に混ざっていればよく、どちらかに偏らない社会というのが求められていくのではないかなと考えています。

水流　学生からはリアルの授業を早く再開してくれという意見の方が多いのですが、中にはオンラインで十分という学生もいます。オンラインで十分という学生は内向的な感じの学生が多いと思うので、そこのケアは必要なのかなと思うところがあります。ただ、いくつか自分の生きていく空間があった方がいいと考えると、バーチャル空間がある種、リアルの場の補完的な息抜きになる、という使われ方がされるのであれば、それは豊かなことだと思います。そういう方向に社会を持っていくべきなのだろうと思います。

伊藤　私の娘は 1 週間のうち 2 晩ぐらいパソコンを介して友人とゲームやっていますが、そういう方はたくさんいると思っています。引きこもっているわけではないですが、引きこもりの人が社会復帰に適応するための経験の土台になるのではないか、使い方によってプラスには十分活きてくると考えています。

松村 2 つ目は山崎先生への質問で、夫の育児はかなり厳しいデータがいろいろ出ていましたが、夫に当事者意識を持って育児に参加するということを進めていく上で、住宅メーカーとして何か提案として考えるべきことがあるだろうか、というご質問です。

山崎　住宅のプランとしては、当事者意識を植え付けるためにどういう平面にした方がいいというのはありませんが、一つ言えるのは、夫がこもる趣味部屋は作るべきではないかと思います。趣味部屋を持ちたいという男性は多いと思います。例えばゲームをやる方なら音漏れせず誰にも邪魔されない部屋を欲しがりますが、女性はキッチンを充実させたいとか、子供を見ながら家事をできるようにしたいという要望が多い気がします。男性は趣味部屋を作ることによって家事からも育児からも逃れられるというか、そういう気持ちになりかねない人もいるのではないかなと思っています。私も子育てしながら働いているので、子供がグズる時に、仕事をしていた方が楽だと思うこともあり、その気持ちは分からなくはないですが、欲しがっているからと言って作ってあげるのは、少し考えなければいけないと思っています。趣味部屋を欲しがっているので安易につくってあげるというのは少し注意しないといけないことかなと思います。当事者意識をもつには本人が意識改革をしてくれるしかないのですが、家の父親が家事をしてなかったので男はしなくて良い、となってしまう話もよく聞くので、親御さんは是非、自分はしてなくても、やるべきことなのだと子供に指導していただくのが一番かなと思います。

松村「創造する生活者がかっこいい」という捉え方は、中高年やシニアにも感じることがありますか、というご質問です。

水流　私もシニアですが、自分自身そのような人をかっこいいと思う気持ちがあります。「まちなかキャンパス長岡」と言う生涯学習の機関がありますが、そこの受講者は年配の方が多いです。この 4 月から「まちなかキャンパス長岡」の学長になったのですが、今後どう展開していこうかと考えたときに、やはり講座で学んだことを実践するということが「まちなかキャンパス」の次の展開の方向なのではないか。学びに来ている方たちが 1 時間半の講義を聴いて終わりではなく、それをどう自分の実生活に活かしてクオリティオブライフを良くしていこうか。さらにはそこからどう繋がって交流していこうかというところに向かうことだと思っています。

伊藤　先日東北に行った時の巻組の渡邊享子さんも、貴凛庁の三井さんも、自分のライフスタイルというものをリスクを負いながら自分で実行しているところがかっこよかったです。楽しいだけでは楽しくなく、何らかの責任とリスクを自分で取り、バランスをとっていくところにスリルがあり、スリルがないと人間面白くない、ということを感じました。私もコロナ中に自分が関わる NPO でイベントをやったのですが、皆で手配をし、人間をわりふって、予算をわりふって、雨が降る中でイベントやったのですが、そこには責任とリスクがあるわけです。そこでやり遂げる喜びというのがあります。若い人はお金がなくても体力があります。我々はお金がないとは言いませんが体力のリスクに引っかかります。その中で、ギリギリの、それぞれができることをやることの喜び、というのがなかなかよくて、かっこいいと思いました。

岩佐　渡邊さんや三井さんがかっこいいなと思うのは、潔いというか、恐らくいろんなことを割り切ったのだろうというところで、自分は色々なしがらみなどをついつい引っ張ってしまいがちなのですが、パチッと切り替えているところが、そのかっこよさなのかと思っています。

松村　今回視察に行った中でも、とりわけ石巻の渡邊さんとキボッチャの三井さん、この 2 人がかっこ良かったという感想はその後お聞きしますが、こういう方々の活動は、私がご紹介したコミュニティ大工もそうですが、検索をかけるとたくさん記事が出てきたり、その人自身がフェイスブックなどで発信されたりしています。リアルなかっこよさは会わないと分かりませんが、どんな活動をされているか、どういう経緯でそれをやっているかなど、ご

関心があれば是非ご覧になって頂ければと思います。

松村　次の質問は私に来ています。全般的に 3 つほどあります。先ほどご紹介したコミュニティ大工の加藤潤さんの、収入や現場の体制を含めてのことだと思いますが、ある種の成立の仕方についてです。

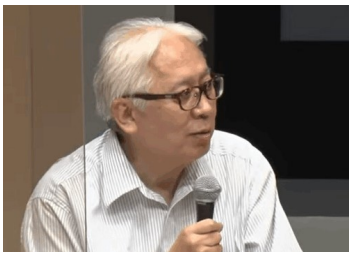
まず一つは、加藤さんに限らず、コミュニティ大工をやっている多くの方が複数の仕事をしており、それぞれから収入があるというパターンがあります。現場に関しては、加藤さんにお聞きすると、先ほどご紹介した公務員大工やコミュニティ大工は無報酬なのに、自分だけもらっていいのだろうかという思いはあるが、現場全体をマネジメントしていることもあるので、日当 15,000 円はもらっていますと言っていました。儲けることは考えていないようですが、このモデルを広げたいとは思っているようです。施主の直営で請負ではないので、基本日当ベースにされているようでした。

次に素人の方々が参加して工事をするときの現場の安全管理ですが、これは結構難しい問題で、質問や議論もそこで行いました。今回の研究会の中でお話を伺った、つみき設計施工社の河野さんという市川の設計事務所を経営される方がいます。住み手に施工に参加してもらい、一緒に形をつくる活動をされていますが、その河野さんも一緒に鹿児島に見学に行きました。見学先で河野さんは保険の問題はどうしているのか、という話になりましたが、イベント保険だと言っていました。年間 1 万円ぐらいで何人でもいける、ということを聞いて、加藤さんはメモしていました。そういうリスクや課題はもちろん他にもたくさんあり、まだ加藤さんの中でも解決してないことはあると思います。

次は工期の計画ですが、計画は立てられていませんでした。たまたま来た、という人が大勢いるためです。今日は床張りをやるといった時、工具の数も限られているので、誰に何をしてもらうかは加藤さんを中心とする何人かのコアメンバーが判断してマネジメントするようですが、その辺は冒頭の「ゆるさ」で、誰かが遊んでいたとしても、そのことで稼働率がどうこうということもなく、「じゃあ私は料理を手伝ってくるわ」という感じで済んでいると言います。体制としてはそういうことのようです。

経済的にどのように成立していくか、疑問というか、どうしていくのだろうというのはありますが、私自身が考えているモデルは 1970 年代の終わりに、あるイギリスの経済学者が書いた「21 世紀の仕事はこうなる」という本の中にあります。人々の仕事は全て自身の仕事になっているという予言がされていて、「自身の仕事」は英語で「own work」と言いますが、own work になると雇用ではなく、自分が「お互いさまと」言えるような範囲の人との間で何か役に立つことをする、しかも自分の裁量で決める、これが人間の仕事の基本になっていくと書いてありました。今の経済の仕組みの中で、own work の人たちがあらわれて来ている時に、その過渡的な経済的成立の仕方というのはどうなっていくのかというのは、加藤さんも含めて模索状態にあるということなのかなと思いました。質問票は以上で終わりになります。

松村　パネリストの方に、一連の議論もお聞きになった上で、この場で付け加えて言っておきたいことや、もう一つ質問したいとか、順番に聞いていきたいと思います。



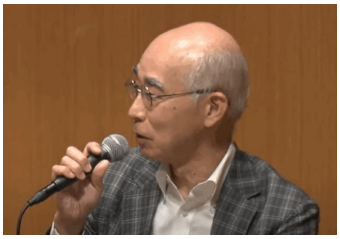
伊藤　住宅は電化製品とは違って、画一的に同じものがいっぱいあるところに住むというのはちょっと違うような気がする。ライフステージによって、いいなと思う住宅はどんどん変わっていってしまう。子供を育てる、自分が歳とる、そうすると住宅に求めるものも変わる。大型の住宅提供者は、住まい手のリテラシーが情報社会になって上がっていって自分で選ぶようになると、いろんなものに対応する「商品」ではなく「住まい方」を提供することになり、そこから自分にあったところに住むという社会になるのかなと思う。その時のキーワードは「毎日が楽しい」とか「喜びがある」などで、そこに見栄を張るような時間やお金を費やすのはもったいない、というような世の中になっていくのではないかなと、 皆さんのお話を聞いていて思いました。

岩佐　今日、松村先生の話を伺っていて、質問にもありましたが、一体この人はどうやって食っていっ

ているんだという疑問をすごく感じる一方で、ある意味加藤さんはソーシャルキャピタルだけ、社会関係資産だけで食ってる人という感じであるのかな、もう全然違うシステムに乗っかりつつあるのかなと思いました。あと、先ほどのカッコイイという話でふと思い出したのですが、石巻に行くとき、そこは志の高いボランティアの人がたくさん集まって、意識高く社会的なことが行われている場所というイメージがあり、渡邊さん会うときは少し構えて行ったら、まさにゆるかったので、もう既にそういうフェーズではなく、セカンドフェーズに入っているのだなと思った。ライフスタイルがどんどん変わっていくのと同じように、こういうこともしばらく経つと全然変わってくるという、一つの大きな発見をしたと感じています。

山崎　この研究会に参加してから、いろんなトライをしている人を見てきましたが、一過性のものが多く長期で続けられるのか、それが本当に 10 年後も続いているのか、ということを毎回疑問に思っています。また、そのイベントに参加すること自体も、仕事で忙しいとハードルが高くなるので、毎回発表をされる人に、参加する人の心理的ハードルをどう下げたらいいかと質問もしてきました。活動は魅力的で楽しいと思うので参加してみたい気持ちはあるものの、そういう生活をしていて社会保障や保険などはどうなるのだろうと考えると、思いとどまるところがあります。コミュニティというものは時間が経つと固定化するので、やはり仲間内感が強まり、途中からの参加はしづらくなると思います。今日、松村先生の「ゆるさ」の話を伺い、やはり「ゆるさ」というのはすごく重要な要素で、途中で入っても出てもいいし、そのことで何も咎められなさそうで良いと思います。でもその「ゆるさ」がどこまで継続するのか、というのも一つ疑問にあり、そのうちルールを作りたがる人が出てきて、ルールができていくと「ゆるさ」がどんどん厳しさになりそう。また、その代表の方が経済性を求め始めた時点で「ゆるさ」は崩壊するなと思ったこともあります。そこで質問で、その「ゆるさ」を継続していくためにはどういう要素が必要で、どのようにやっていったらいいのでしょうか。

松村　ずっと続くのかというのは、私の答えは「続かない」です。あのビートルズも 10 年も持っていません。グループ活動のようなもので、いつまでもやっていくのはなかなか難しく、マンネリ化してしまいます。例えば加藤さんはコミュニティ大工というふうに呼び方を考え始めたのは、世代交代を考えてのことだと思います。今のコミュニティ大工の仕組みは、加藤さんの人柄で持っている感じです。全員がファーストネームで呼び合っていて、加藤さんも皆から「ジュンさん」と呼ばれています。おそらく加藤さんは、山崎さんがおっしゃったように、あまりルール化されるとまずいと、すごく意識していると思います。加藤さんは普通に大企業で勤めていた人なので、がっちりルールの中で仕事されてきた経験があった上で、今五十過ぎでこういうことをやっているので、後継を育てて「ゆるさ」を続けていけるようにしていると思います。ただ、次の世代になったときにルールをつくり始めるのではないかということは、分からないところです。



水流　こういった「まちづくり活動」は、確かに徐々にメンバーが固定化していきます。外からグループに入りづらいものになっていくので、リーダーはいくら周りから必要だと言われても、10年たったら身を引くなどしなければならないと思います。ルールを作ろうとなっていくことについては、「ルールで縛るのではなく、マナーを重んじよう」という話を聞いたことがあります。これは思いやりをもっていこう、ということにも通じますが、これも礼儀作法のように重苦しくなってはいけないのでしょうが。

それから巻組の渡邊享子さんは「去る者追わず、来る者拒まず」と言われていました。覚悟ができていてカッコイイです。そのくらいの気持ちで楽に構えていたら良いということなのでしょうが。もう一つ、「建前的な使命感ほど厄介なものはない」と言っていました。建前的使命感を振りかざすような人がいて

はダメだということです。私は真からこう思う、というものを持っていないと本当の気持ちが伝わらない。きっとそういう人たちがチームをなしてないといけないのだろうと思います。

話はそれますが、今の市場を中心とした経済システムの中で、このような、ゆるい、お互いが助け、助けられ、という価値観に基づくやり方に変わっていくにはどうしたらいいのか、私も松村先生に聞きたいと思っていました。自分のコントロールが及ばないような大きなシステムの中だけでは、人間は疎外感を感じてしまうので、その中にもう一つ、身の丈サイズの自分あるいは自分の仲間たちでなんとかやりくりできるシステムが社会をつくっていく、そのようなことがすごく大切で、安心感にも繋がっていくのだと思います。own work とおっしゃっていましたが、自己裁量的にふるまえる、そういった場や時間というのが自分の人生の中にあるといいなと思います。それを追求していく価値はあると若い世代は分かっていて、一方で大きなシステムの中に身を置きながら組織の中では大人しくしているものの、実はプライベートでは違う一面を持っていると言うのは、そういう時代になってきているのかなと思ったりもしています。

松村　また鹿児島の話ですが、加藤潤さんは先ほど申し上げたように、まず頴娃町を、観光で人が訪れる街にしようと活動を始めて、ある程度成功しましたが、それをやっていたのは NPO 法人「頴娃おこそ会」といいます。人が来るようになると、そこでレストランやゲストハウスの経営などの商業的活動を始めるわけですが、そこは NPO 法人が 49%出資した株式会社にしています。経営しているのは、加藤さんがこの人はと思った、広島からやってきた 32 歳ぐらいの若い方です。加藤さんの「みんなで楽しく作ろう」というのとはまた違い、カフェ 1 つ出すにも、すごくマーケティングをしています。ここのペルソナは 25 歳から 28 歳の若い女性で、これはこうなので、こういうふうになり、こういう単価設定にするなど、完璧にやっています。お互いに楽しくやっていきながらも、新しいスモールビジネスでもきちっと成立させていくことで地域が活性化していくという、今の経済との折り合いの付け方は特に若い方を中心にやっているのだなと思いました。

伊藤　最近の若い人はゆるく、我々から見たら責任感がないように見えることもあるが、実は非常にしっかりしています。私の子供の時はマーケティングという言葉はそんなに使われていなかった。なぜかというと物が足りなかったので何でも売れた。洗濯機、冷蔵庫、炊飯器などが売れた時代です。住宅もビルもどんどん作ろう、そういう時代でした。今の若い人の方が、そんないい加減さはなくて、シビアに経済を見ているし、自分がこれからどうやって暮らしを立てるかというのは、山崎さんがおっしゃったように、きっとどんどん良くなるという根拠のない楽観的な見通しもなく、もっとシビアに見ていると思います。そして、必要な発言はきちんとしているように思います。例えば東京都の PTA が PTA の全国ネットから外れるということが決まったようですが、既存の PTA から外れたいとは、私の時代ではとても言えなかった。でも本来子供の面倒を見たいのであればそこに目的意識を持つべきであって、上納金システムとは何なのだ、と言えるようになり、我々の時とは変わっているという気はしています。

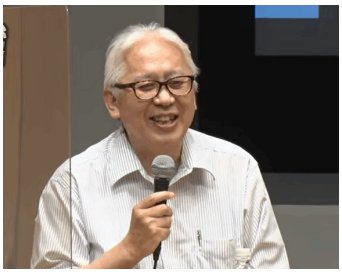
アキュラホームという会社で見ると、今までは若い人たちの採用・育成にお金をかけ、30～40 歳になってその経費を回収し、そこから先は会社の利益にするという事業モデルであった。若い人がノウハウを身につけたら起業してしまう世の中になったら育成費は全部パーです。企業の方も、副業を認めることや、もっと生きがいを追求できる会社にするなど、変わらないといけないのかもしれない。終身で同じ企業に勤める時代は終わり、日本という大きな社会で見たら、若い時に培ったものを使って起業をし、新たな価値を生み出してくれれば、それはそれで全体のパイが膨らむ話なので、決して止めるべきことでもないと思います。私が NPO でイベントを曲がりなりにもできるのは、公務員の時にいろんなノウハウを身に着け、マネジメントの経験もあった為できたということもあります。全ての経験が今の自分を作っていって

います。雇用する側の育成モデルが転換していかないと、誰も幸せになれない世界になります。水流さんがよくおっしゃる、社会をマネジメントする側にいるものは、それを促進するようにきちんと体制をつくってから退職してくれというような話につながっていくのではないかと思いました。

岩佐　先ほどの話に戻ってしまいますが、水流さんの、やりくりするシステムと大きなシステムというのがすごく納得したというか、今風だなと思ったのは、例えば昔なら資本主義が許せないから皆で種子島に集合してヒッピーするというように、いったん世の中のものを否定したあと、自分たちで作り直すということがあったのに対して、今はある大きなシステムをいったん受け入れ、その上で不満に思うところは自分達だけで出来るものをうまく作ってしまうというところで、ある意味、大人なのだと思います。渡辺恭子さんも、その大きなシステムに乗りつつ、今風なクラウドファンディングとか、東京にも拠点があるとか、別の大きいチャンネルがあり、その 2 つをうまく利用しているというところがすごくいいなと、面白いなと思う。先人が作ってきたものを活かしながら次のものが生まれていく、良い社会なのかなという思いがある一方で、大きく作った枠組みがいつまで守られるのかが気になるところでもあります。

山崎　仕事の捉え方について、昔は会社に入り、がむしゃらに働いて、給料を高くするために出世して、というのが目指すべきものとして示されていた気がしますが、今の若い人たちにとって仕事というのは、人生の中で生きていくための一つのツールでしかない。お金を稼ぐという実質的なものはありますが、大儲けしたいわけではなく、楽しく毎日を過ごせるだけの収入を得るために働いている。住まいを楽しむとか、何かを楽しむというキーワードが最近沢山出ているのは、自分の人生を自分なりに豊かにするためには、どう生きていけば自分はストレスなく、より充実して人生を終えられるかと考えているのではないか、と日々思っています。

水流　もちろん個人の楽しさの追求っていう面はありますが、そこで終わりではなく、今の若い世代は、みんなが楽しむことができるような社会になったらいいな、この意味がつくのだと思います。それはすごい救いだと思っています。自分 1 人だけが楽しければいいというのではなく、みんなが一緒に楽しかった嬉しかった、そんな社会を作りたいと真面目に言っています。私たちの年代は恥ずかしくてとても言えないが、そこに大きな違いがある。非常に健全だし頼もしいと思っています。教わることもとても多いです。



松村「住まい手が参加する住まいと住環境づくりの意味と実践」では、住まいづくりに住み手が参加する動きが出てきているということを、いろんな人の話を聞いて共有してきました。私が個人的に強く思っているのは、お客さんがどうこうというより、住宅メーカーや住宅業界で働く人自身が生活者として豊かかどうかの方が問われる時代にあって、豊かでない人が売っている住宅は豊かではないものになるはずで、そのことを多くの住宅業界で働く人に意識してもらうことが一番大事だと思ってこのテーマ設定をした感があります。

この研究会自体の結論は、今日話したように「住まいづくりを楽しむのは大事だ」ということです。研究会は最初からこの結論の前提で始めて、それをみんなで確認していくという形ですすめ、今日それぞれお話いただきました。

今回、先生方にそれぞれに自由に思うところをお話いただき、ほぼ初めて意見交換をした感じでしたので、聞いている方々にとって分かりやすい話だったかどうか分かりませんが、何か心に残るような言葉な

り考え方があれば幸いだと思います。